九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

文心雕龍(下篇)

目加田, 誠

https://doi.org/10.15017/2332950

出版情報：文學研究. 41, pp.1-20, 1951-03-10. 九州文学会
バージョン：
権利関係：

文心雕龍（下篇）

目加田誠

神思第二十六

古人云ふ「身は江海の上に在り、心は玉城の下に存す」と。之は神妙なる心のはたらきを謂ふのである。文を作るに当つての霊妙な心の働きはまことに遠いものがある。されば寂然慮を凝らしてその思千載の古に接し、悄然容を動かしてその視ること万里に通じ、吟詠の間に珠玉の言葉を吐き、目前に風雲の色を繰りひろげてみせるのは皆そのよく思ひきわめてゆく道の致すところである。故にこの思ひきわめゆく道こそ霊妙なるもので、こゝに精神は外物と相遊ぶのである。精神は人の胸中に居つて、志気といふものがその鍵を握つて居り、物事は外より耳目にふれて、言辞がその枢機をつかさどる。この言辞の枢機に通じうれば、物事一つとして貌を隠すところなく、この志気の鍵が塞つてをれば、精神はたゞ退き遯れるばかりである。されば文の思をとゝのへめぐらすに、大切なのは心の虚靜である。五臓を滯ることなく洗つて精神をすゝぎ清め、学を積んで博き知識の宝を貯へ、ものゝ理を参酌して才を富かにし、深きをきはめ高きを研めて、くまなく幽微を照らし、之をわがものとして以て文辞をくりのべる。かくして始めてとらはるゝ所なき心の働きも自づと声律にあらはれて文字に表現され、口に伝へがたき芸術の妙技も、思に従

つて之を発揮することが出る。之蓋し思のまゝに文を馭する第一の法、文章を構へるに先づ何よりも大切なることである。

それ神思が一度び活動しようとするときは、よろづのことが競ふて胸に萌し、形狀しがたいものをも捕捉し之を表現しようとする。山に登れば情、山に満ち、海を観れば意、海に溢れ、我が才の多少ともあれ、風雲と並び駆せんとするのである。かくて筆を取らうとするに当つては、未だ辞を出さぬ前は、気はます〳〵満ちるが、一旦文章が出来てみると始めの心は半ば摧けて了つてゐる。之は何故かと云へば、意は空に躍つて奔放自在になり易いが、辞は一々実に当つてゆかざるを得ぬ故に巧みになり難いからである。かくて意は心の思に生じ、言辞はこの意から生ずる。言葉がぴたりと物の枢機をとらへれば、物に隠貌なく思ひは融通無礙であるが、もし然らざればその間、思は千里を隔てて了ふ。義理は胸中にあるのに徒らに之を遠く求めようとすることになる。故に常に心を虚靜に持し、文の術を養ひ、徒らに苦慮をつとめず、美を内に抱き契（わりふ）を胸に保つて、必ずしも情を労ぜざることである。

（心は外物に接して動き、言葉によつて外物を捕へる。言葉は思理の致すところにつれて流露すべきものである。それには先づ心を虚靜空明にし、且つ学を積んで理を尋ね才を富かにし、研精積思して幽微を窮め、事物心に明かになつて、始めて言葉は外物に密に当つて動かぬものとなる。意は空に躍つて奇なり易きも、之を文辞に表現するには自ら文の術といふものがあるのである。かうして心を虚靜に保ち、平素文の術を養ふて、自然に文の成るを求め、徒らに名文を成さうなどと苦慮しないことが大切だといふ意。（養気篇などを参照））

人の持つて生れた才能といふものは遅速夫々もち前を異にし、又文の体裁も大小夫々事の相違がある。司馬相如は筆

を含んで筆の毛を腐らせた程文を作ることが遅く、揚雄は筆をとつて苦慮の結果夢に五臓が地に傷れ出ると見たといひ、桓譚は苦思によつて疾を得、王充は思慮によつて精気を竭くし、張衡は二京の賦に思を研めること十年、左思は三都の賦を練つて十二年を要した。之らは長篇大作であるとは云へ、亦思の遲緩であつた例である。淮南王は朝の間に離騒を賦し、枚皐は詔に応じて賦を成し、曹子建は文章を書くこと口誦の如く、王粲は筆をとれば宿構あるが如く、阮瑀は馬上鞍によつて書簡をつゞり、禰衡は宴席の間に奏を草した。之らは短篇であるとはいへ亦思が敏速であつたのである。

大体才の駿敏な人は、心に肝要なる文の術を把握して、先づ敏く思慮を定めて臨機応変に断を立てる。之に反して思深き人はあちらこちらに情をめぐらし、いつまでも考へ疑ひ、思慮を研めてはじめて定まる。一は心機敏なる故に造次にして功を成し、一は思慮多き故に愈々久しきほど成績をあげる。その難易は異なるが、共に博識練達の致すところだ。然るにもし学浅くして空しく遅く、才疎くして徒に速くて、それでよい文章家たるがごときことは未だかつて之を聞かぬ。

（学博くして始めて思慮をめぐらす意味もあり、才練達にして始めて造次にして文を成すことも出来る。）

故に筆をとつて思を綴るに、必ず両方面の患がある。心中條理余りあるものは文彩貧しきに苦しみ、文辞浮華なるものは一貫の理を傷けやすいことだ。してみれば見聞該博なることは文辞の貧しさをたすける糧であり、心中一貫の理を立てることは文辞の乱脈を救ふ薬である。博くしてよく一なるこそ文を成す心力に助けあることだ。

ところでものゝ情は品さま〴〵、之が文に現れてはその体いろ〳〵に変る。拙辞の中にも巧義を孕み、凡事の中に

も新意を生じうる。布と麻を比べれば、その麻の量は同じくとも、一度織つて人工を加へた上は、煥然としてめづべきものとなる。但し、思表文外にひそみたゞよふ微旨曲致といふものは、言にも筆にも伝へ得ぬところで、精をきはめて始めてその妙を明らめ、変をきはめて始めてその変化の理に通ずるものなので、かの伊摯が鼎の味を口に言ひ得ず、輪扁が斤の扱ひを口に伝へ得ぬやうに、まことに微妙なものである。

贊に曰く、

神は象を用つて通じ、情変孕む所。物は貌を以て求め、心は理を以て応ず。声律を刻鏤し、比興を萌芽す。慮を結んで契を司り、帷を垂らして勝を制す。

（精神は言葉によつて象をとつて外に通じ、そこにさま〴〵な変化を生ずる。外なる形と内なる理と、物心こゝに相応ずる。かくして精神は表現を得て文が生ずる。心は虚靜にして外物と契合し、たゞ靜かにねて功を成すのである。）

体性第二十七

情内に動いて言形れ、理心に起つて文となる。蓋し隠れたるよりして顕かなるに至り、内なる心よりして外なる境に合するものである。然もその間才に庸俊あり、気に剛柔あり、学に深浅あり、習に雅俗あり、皆先天の情性の致すところであると共に、又後天の陶冶薫染の凝り成すところである。さればまことに文章の世界は波瀾畳重一すぢでない。

（黄侃の札記に曰ふ「体とは文章の形狀を指し、性とは人の性気殊なる有るを謂ふ。性気の殊なるによつて為る所の文も狀が異る。然も性は天より定められたるものとはいへ、亦人力もて之を輔助することが出来る。故に習ふ所

を愼しまねばならぬと。この篇の大旨は斯に在るのである。」又曰ふ「才気は惰性に本づき、学習は陶染に帰する。つづめていへば性と習の二つである」と。）

故に文の辞理の庸俊は一にその人の才に従ひ、風趣の剛柔は一にその人の気性により、趣意の深浅はその人の学にそむかず、文体の雅俗はその人の習に反かぬ。各々その個性に従つて作り、夫々に異ることは人面の如くである。だが結局の所之を総じていへば、次の八体を数へるに尽きよう。即ち一に典雅、二に遠奥、三に精約、四に顯附、五に繁縟、六に壯麗、七に新奇、八に軽靡。

典雅とは経典に法式をとり、儒の門に従うもの。

遠奥とは文采典麗、老荘の道に分け入るもの。

精約とは字句を確かめ考へて、寸毫を析つもの。

顯附とは言辞卒直に趣意暢達し、理切に人を肯かすもの。

繁縟とは喩博く采こまやかに、そのかゞやき枝葉にまでわたれるもの。

壯麗とは論高大に体宏く、かゞやかに異彩を放つもの。

新奇とは古を擯け当世を競ひ、かたよつて奇をねらうもの。

軽靡とは文辞浮華柔弱に、とりとめもなく俗に追随するもの。

故に雅と奇とは反き、奥と顯とは殊なり、繁と約とは殊ひ、壯と軽とは乖き、文辞の根本枝葉はすべて以上の中に包括されよう。

ところでこの八体は常に遷つて必しも一に止つて動かせぬものではなく、それは学問の努力によつて功を成すものである。才力が中に在り、血気が之を駆り、気もて志意を実たし、志意もて言が定まるので、いかなる美しいことばも、もとは人の情性によらぬはない。

されば賈誼は俊敏なりしが故にその文辞文体は清潔にして無駄がない。司馬相如は世に傲つてほしいまゝな男で、従つて文章も條理放侈に文辞が氾溢してゐる。揚雄は沈静な性格だつたので、その志はふかくひそんで味ひ深い。劉向は簡易で物に拘泥せぬ男、乃で趣旨は昭かに事は該博である。班固は品のいゝ人であつたからその文体は緻密で思もこまかい。張衡は広く物に通じた人で、従つてその思慮も辞藻も周密である。王粲は気鋭く落付きなく、乃でその文章にも穎鋒があらはに出て、果敢の才を示した。劉楨は気性褊り一くせあつて、その言壯にして人を駭かす情あり。阮籍は不羈卓絶、故にその文は俗を離れて気韻遠くこゆるものあり、嵇康は俊逸任侠、故に興趣高邁、辞采峻烈である。潘岳は軽躁敏捷、故に鋒あらはれて韻致に乏しい。陸機は荘重、故にその文情繁多で辞はあらはでない。凡そかくの如く類推してゆけばその人の内なる性質と、そのあらわした文章の体とは必ず相符合するものである。之実にもつて生れた自然の性質、人のもつさまゞ〳〵の才気といふものゝ大略ではないか。

凡そ才には生れつきがあり、学はその習ひ始めが大切である。梓をけづり、絲を染めるにも、その始めに手を下すのが大事な仕事である。一旦器が出来、絲がきまつて了ふと、もはや之を変へる事はむつかしい。だからして子供が文辞をまなぶにも、必ず雅正な作を先にする。そして根幹立つて後、それより次第に枝葉を求めてゆけば、思にかたよる所無く、八体夫々に変通よろしきを得て、その根本中心をつかんでゐれば、すべてこゝに集つてこよう。故

に宜しくその体にならつて習を定め、己が性質に従つて才を練つてゆくことで、文章の指導は此の道を用ふるばかりである。

贊に曰く、

才性区を異にし、文辞詭繁し。辞は膚根たり、志は実に骨髄なり。雅麗は黼黻、淫巧は朱紫。習亦眞を凝らし、功は漸靡に沿る。

（人の才性はまち〳〵で、文辞には変化奇巧限りがない。文辞は表にあらはれるものであり、志はその内なる骨髄である。雅正の麗しさは黼黻の文采にたとへ、淫辟の巧みさは朱紫の間色にたとへられよう。人の習も凝つては眞となり、工夫をつんで次第に功を成すことである。此篇の体性とは人の個性とそのあらはれによる文の体勢を論ずる。而も人の性格も亦学習によつて陶冶し得る。それには先づ始めを慎しみ、雅正の作に習ひ、根幹立つて後、各々天性に従つて才を練つてゆけばよろしい。

こゝに作者は文の八体をあげ、且つ先人の例をかゝげて、その性格とその文体との離すべからざるを証明した。この八体を並べ数へることは、後の評論詩話などにも競ふて之にならひ、或は更に細かく分ち数へて、文体批評の例となつたものである。

風骨第二十八

詩には総じて六義あり。風はその首にをかれてゐる。この風こそ詩が人の心を感動させる本源であり、志気のあらはれて働くところのものである。

（本篇標題に風をいひ、篇中に実は気を言ふものが多い。気は内に充満するもの、それが一度び動くとき、之をさして風といふと見れば良からう。詩の六義。風・賦・比・興・雅・頌。）

されば怊悵情を述べるには、必ず先づ風により、沈吟文辞を設けるには何よりも先づ骨を立てることを第一とする。故に文辞に骨の大切なことは、身体に骨格ある如く、文の情緒が風を含んで生動するのは恰も肉体の気を保つて始めて生きるが如くである。文辞の結成が端直であればそこに文骨が立ち、意気が駿爽として生動すればそこに文風が清らかに生ずる。若し辞藻豊かに足りつゝ風骨の生動なくんば、その彩も鮮かさを失ひ、その響にも力がない。されば思を綴り文を製するのに、務めて満を持して気を守り、剛健なる気が充実した上で始めてその光が新に輝く。風骨の文にとつて大切な用を為すことは、譬へば飛ぶ鳥の翼を使ふが如くである。

（その確固たる骨格、構成と、駿爽たる気迫風趣なくば鳥は落ち文は沈むであらう。）

故に骨に工夫を練つたものは、辞を析ち設けること必ずや精確に、風に心深きものは情を述べて必ずや顯かである。文字の用ひ方が堅固にして動かし難く、韻響凝つて澁滞無きは全く風骨の力である。義理乏しくして文辞のみ肥え、繁雑にして統一を失ふは骨なき証拠であり、思周ねからず、索莫として生気なきは風なき証拠である。

（人に端正なる骨格あり。潑溂たる生気あつて始めてそのいのち躍動する如く、文亦しかとした骨組によつて文字の結成堅固に、而も駿爽たる生気充ちて始めて文のいのちが生動する。）

昔潘勗が魏の為めに九錫の文を作り経典の文を模倣して、当時の群才に筆をかかせたのはその骨髄が峻なりし故である。司馬相如が仙を賦して、その気雲を凌ぐと称され、蔚然文章の大宗と為つたのはその風力の遒かりし故である。

よくこの要を鑒みてこそ文章を成すことが出来、若しこの術を違へたならば、徒らに文采の繁多を務むるとも効なきことである。

故に魏の文帝は「文は気を以て主とす。気の清濁は人によつて体を異にし、強めて致すことは出来ぬものだ」と云つた。だから彼は孔融を論じては「体気高妙」といひ、徐幹を論じては「時に齊気（緩漫なる気）あり」といひ、劉楨を論じては「逸気あり」と云つた。劉楨も亦云ふ、「孔融の文は卓絶、まことに非凡の気あり、筆墨の殆ど勝えぬ所」と。何れも文に気を重視する趣旨である。

夫れ翬翟は五采を備ふるもその僅かにとぶこと百歩にすぎぬは、外なる藻飾は豊かだが内なる骨気の力が揚らぬからだ。鷹隼は彩乏しきも高飛して天に至るは骨勁く気猛なるが故だ。文章才力も亦此に似るもの有り。若し風骨あつて采乏しくば文章は鷹隼となり、采あつて風骨乏しくば文章は雉となつて揚らぬ。たゞ采藻かゞやいて而も高く翔けてこそ、まことに文筆の鳳凰と謂ひ得よう。

こゝでもし経典の規範をよくわがものとし、子史の手法を駆馳し、あらゆる文情文体をつぶさに深く曉らめるならば、然る後にして始めて新意を出し、奇辞をも飾ることが出来よう。文の体に昭かなる故に新意を出しても体が乱れず、文の情のさま〳〵なるに曉るき故に文辞奇なりともその場の情を黷さぬのである。もし風骨と辞采との工夫に充分心を練ることなく、而も旧き規範を忽せにし、新奇の作を馳せようとするときは、たとへ巧みなる思ひ付きを得ても、多くは失敗に了る。それは恐らく無駄に奇辞を構へ、あやまれる道もて常道と為すが故であらう。周書に「辞は要を得るを尚び、徒らに異を好まぬの」とあるもは思ふに文の乱るゝを防ぐものである。

然も文章の道は多岐で、人は各々好む所に向ふ。文の道に明らかなるものも之を人に授けず、文を学ぶ者も亦之を師とせぬ。乃で次第に華侈に習ひ、正道を離脱してもとに反るを忘れる。もしよく正しき法式に確固と立ち、文をして明らかに且つ健ならしめば文風清く文骨峻く、文章は光りかゞやくであらう。よくこれを思ひきはめるならば、文の道とて何の遠いことがあらう。

贊に曰く、

情は気と偕にし、辞は体と並ぶ。文明にして健ならば、珪璋乃ち騁せん。彼の風力を蔚にし、此の骨鯁を厳にすれば、才鋒峻立して、符采克く炳かん。

（情は気によつて生動し、辞は体が立つて確乎とする。文明かに且つ健にして始めてその美を馳せる。蔚として盛なる風力、厳として強き骨格あつて始めて才鋒たかく立ち、華采よくかゞやくのである。文辞に端直なる構成あり、且つ之をやるに潑剌たる気が働いてこそ文章は生采を放つ。文に骨あらしむるにはやはり経典に規範し、徒らに新異を追はず、正しき法式に確乎として立たねばならぬ。文に風あらしむるには常に気を養ひ内に充たして、自らなる機を得てこの気を力強く働らかさねばならぬ。こゝも亦畢竟するに研学と養気の重さに帰するのである。）

通變第二十九

（易繫辞に曰く、化して之を裁するを変と謂ひ、推して之を行ふを通と謂ふ。韓註。変に乗じて往けば通ぜざるなしと。

又曰く、一闔一闢之を変と謂ひ、往来窮らざる之を通と謂ふ。

易窮れば変じ、変ずれば通じ、通ずれば久し。変通は時に趨く者なり。

参伍以て変じ、其数を錯綜し、その変に通じて遂に天地の文を成すと。

この篇に論ずるところ、先づ古に規範を求めて根幹を確立し、時に趨いて変化し、之を推して不窮に通ずるをいふ。）

文を設ける体には一定不変のものがあり、文に変化を求めゆく勢には定まる常がない。何をもてその然るを明にするか。凡そ詩・賦・書・記など、その名とその内容の理とは相因り相俟つもので、此れ即ち文体に常あるものだ。然るにその文辞、気力といふものは変通して限りがない、此れその変化の常なき勢である。文体の種類とその内容の理には常があり、その体は必ず旧き規範による。文辞気力は通変常なきもので、その勢は必ず新らしい時代の調子が参酌されてゆく。故に始めてよく無窮の路を騁せ、不竭の泉に飲むごとく、その用は極まりなきものがあるのである。

然も綆の短いものは深い水を汲んで渇を充たすことが出来ず、足疲るゝ者は途の半ばに止まる。文の條理がそこで尽きるのではなく、通変の術が充分でないからである。故に文を論ずればたとへば草木のやうなもので、根幹は土についてその本性は同じであつても、かほりは陽に向つて品さまゞとなる。されば九代（黄帝・堯・舜・夏・殷・周・漢・魏・晋）の詠歌はその情志一にして文に夫々法則あり。

黄帝の世の断竹の歌は至つて素朴である。唐堯在昔の歌は黄帝の世よりも文が発展してをる。虞舜の卿雲の歌は堯の世よりも文采あり。夏の彫牆（五子）の歌は舜の代よりも繁縟に、殷・周の詩篇は夏の時代よりも麗しい。而も志

をのべ、時世を述べることは皆その揆を一つにしてゐる。

楚人の辞に及んでは周人に法り、漢の賦頌は楚辞の影響であり、魏の策書は漢の遺風を追ひ、晋の詩文は魏の文采を慕つてゐる。かく推論してゆけば、黄・唐の文は淳厚質朴、虞・夏は質朴にして分明、殷周は華麗にして典雅、楚漢は奢侈にして豔麗、魏晋は浅薄にして綺靡、宋初は詭にして新となる。その古の質実よりして遂にこの詭巧となる。時代の近ければ近いほど深みを失ふのは何故か。当世を競つて古を疎んじ、風気次第に衰へたのである。今や才秀でし人々がつとめて文を学ぶに、多くは漢の作品を疎略にして、宋人の集を手本とする。よし古今の作品を備さに読まうとも、やはり近きにならひ、古を疎んずるのである。青は藍草より出で、絳は蒨より生じて、各その本来の色よりも濃いが、もはやそれ以上に変化することは出来ぬ。桓譚の曰く、「われ、当今新進美麗の文を見るに、美なりとはいへ採る所なし。古き劉歆揚雄の言辞を見るに及んでは常に得る所少なからず」と。此れ兎角古きものほど応用変化のきく証拠である。故に青を練り絳を濯いで必ずもとの藍蒨に帰し、訛を矯め浅を飜して、再び古の経典を宗とする。かくて文質、雅俗の間に思を致し己れを正して行つてこそ始めて共に通変を談ずるに足るのである。

凡そ物の形容を誇張することは漢初已に極点に達した。その後といふものは只循環踏襲してゐるばかりで、たとひ飛び挙つて軌轍の外に出てみても、結局その籠の中からは出られない。

枚乗の七発に「東海を通望し、蒼天に虹洞す」といひ、

相如の上林賦に「視れども端無く、察れども涯なし。日東沼に出で、月西陂に生ず」といひ、

馬融の広成頌には、「天地虹洞、固より端涯無し、大明東より暘で、月西陂に生ず」といひ、

揚雄の羽猟賦には「日月を出入し、天と地と沓ふ」といひ、張衡の西京賦には「日月是に於てか出入し、扶桑と濛汜に象る」といふ。

此れ皆広大なる居宇を極言して形容したもので、而も五家一の如くである。凡そかやうな類、相循ひ相因らぬものなく、所謂参伍錯綜して変化させてゆく、通変の自ら定まれる勢である。

されば文に系統あらしむるには総じてその文の大体を宏く立てねばならぬ。先づ博覧精閲、大綱を総べくゝつて我手にその一方を握り、然る後四通八達の路を拓き、胸臆の関鍵、志気をしかと置き、長い轡を自在にあやつつて遠く馭し、あせらずさわがずその馳駆を調節し、情勢によつて或は聚まり或は放ち、志気に乗じて変に応じ時に趨くならば、その光采は虹龍のたてがみを奮ひ、長離の鳥の翼を振ふがごときものあり、かくてこそ卓抜せる文となるであらう。然るを若しせまき見解にちゞこまり、遂に同じ趣旨の中を得意になつて競つてゐるならば、それは所謂庭の中のぐる〳〵まわり、どうして万里の遠きに馳せ得よう。

賛に曰く、

文律運り周ねく、日に其業を新にす。変ずれば其れ久しく、通ずれば乏しからず。時に趨くこと必ず果、機に乗じて怯ゆるなし。今を望んで奇を制し、古に参して法を定む。

（文は日に新であり、文の変化は窮りない。

博く文を学び、体を宏くかまへ、根幹を確立して、その上で自由に機に乗じ時に趨いてゆくならば、変化つきることなく、不窮に通じて、久しく行き詰ることがないであらう。）

定勢第三十

（范文瀾云、勢とは標準也と。思ふに文に各々体あり。その各体に適しい叙述の仕方がある筈である。章表奏議は典雅なる可く、之に嘲弄を雑ふ可きでなく、符冊檄移は明断なる可く、之に空談風月を雑ふる可きでない。文の体に応じて、その自然採る可き態度がある。勢にも剛柔あり、その場〳〵のよろしくとる可き姿を得ねばならぬ意味である。従つてこの篇は前の体性扁とも亦互に参照す可きものであらう。）

文の趣旨はさまぐ〳〵に品かはり、文を変化する術も亦多様であるが、凡てはその場の情によつて文の体を立て、その体に即した態度をとらぬものはない。執るべき態度はその場合に最もふさわしい所に乗じて決するのである。恰も機（じかけ）を放てば矢は直にすゝみ、澗が曲れば流水の回るが如く、自然さうなつてゆく可きところなのである。天は規体（まるく）てその勢自づから回転し、地は矩形なればその勢自ら安靜（じ）であるやうに、文章の体と勢との関係も全くさうしたものである。されば経典を模して法としたものは自ら典雅の美しさに入り、楚辞に效つて作られるものは必ず艶逸の華やかさに帰着する。主旨卑近浅切なるものは文辞もおほむね醞藉に乏しく、立言簡明なるものは率ね辞采も繁縟でありえぬ。譬へば岩に激する水は紋を為さず、枯木には蔭なきが如く、これ自然の勢である。

されば絵画は色を図き、文辞は情を尽すもの、色雑つて犬馬その形を殊にし、情交々あらはれて雅俗そのゆき方を異にする。己が慕ひ習ふところによつて各々その得意があり、嚴重な郭界を設けずとも之をふみ越える事はむつかしいのである。だが文に深い者はあらゆる勢を総べ、奇正剛柔の勢を倶に心得て時に随つて適宜に用ひる。もしひたすら典雅を愛して華麗を憎むなら、兼通の道理が偏（かたよ）り、夏人が弓と矢とを爭ひ誇つて、各弓矢の一方を執つて動かず、

遂に夫々独りで射る事が出来なかつたやうなことになる。もし又雅と俗と区別なく一篇にまざるなら、統一ある態度が破れて、かの楚人が矛と楯とを共に誉めて、両方とも售ることが出来なかつたことにならう。だからして様々な体を我が心にをさめ、大切なことはそれを明らかに区別することで、声律辞采をその時の勢に随つて各々配して用ひねばならぬ。

章表奏議の体には典雅を標準とし、賦頌歌詩は清麗を儀表とし、符檄書移は明断を法式とし、史論序註は確実で要を得るを規範とし、箴銘碑誄は広深を以て体制とし、連珠七辞は巧豔を事とする。此れ文の体に従つて勢を成し、変に随つて効果あらしめるものである。よしその上文辞は互に合せ参へ、文質互に雑はるとも、たとへば五色の錦もその本采を以て素地とするやうに、各体本来の自然とるべき態度にそむいてはならぬ。桓譚は曰く、文章家は各々好みあり、或は浮華を好んで質実正確といふことを知らず、或は繁多を美として肝要を得ることを顧みぬと。陳思王も亦云ふ、「世の作者には、或は煩文博採を好んでその趣意を晦渋にするものあり、或は弁別論理を好んで微細を分析するものあり、習ふ所同じからず、その務める所も各々異る」と。此れその夫々に勢のことなるを言ふものである。劉楨は云ふ、「文の体旨は強きを尚ぶ。その辞尽きて勢余りあるは天下に一人のみ、何人も得べきことでない」と。

(一)原文、文之体指実強弱とあり。通じ難し。黄侃は「文之体指貴強」に作るべきものかと疑ひ、范氏は「文之体指、実殊強弱」に作るべきかといふ。

この劉公幹の言はどちらかと云へば勢に気といふことを兼ねて云つてゐるのであるが、然も文をやる勢といふものには、その勢に剛柔あり、必しも雄壮慷慨の言を為して始めて勢と云ふのでは無い。

又陸雲は自ら曰く、往日文を論ずるに文辞を先にして情を第二とし、勢を尚んで潤沢を重んじなかつた。張公の文を論ずるをきいて始めてその言に従はうと思つたと。

(二)陸雲が兄平原に与へた手紙。文選所收。

夫れ情は固より辞に先立つもの、勢といふも実は潤沢を必要とするものであり、彼の言は初め迷ひ、後によく善に従つたと謂はれよう。

近代の作者は概して詭巧を好むやうだが、その体のよつて来る所を考へるに、正しからぬ態度が次第に変化をかさねて、古の法式を厭ひ、ことさらに穿鑿して嶄新をねらつて来たので、そのいつはりをよく見れば、難しいやうで実は他に術はない、たゞ「正しきもの」に反むくばかりだ。だから文字に於て正の字を反対にしたものが乏であり、文辞に於ては正に反するを奇といふ。奇をねらふ方法は必ず文句を顚倒し、上句の字が実は下句の字に加はる可きものあり、中の辞が途中で外にはづれたり、上下前後互に回つて定めなきときは之を新色ありとされるのだ。夫れ四通八達の大道は平坦であるのに、却つて小さい近みちを行く者の多いのはその近きに趨るからである。正しい文章は明白であるのに、却つて之に反する奇言を務めるのは俗に趨くからだ。然も充分心に会得せるものはその意の新なるを以て巧をあらはし、だゞ苟めに異をねらふものは文の正しき体を失つて怪をなすのみ。古き法式に練へたる眞の才ある人々は、正を執つて奇を馭し、所謂新学気鋭の人たちは奇をのみ逐つて正を失ふ。その勢流れて反らざるときは、文の正しき体は遂に弊れて了ふだらう。この間の情、この方法を把握すること、亦思はずして可からうか。

贊に曰く、

形生じて勢成り、始末相承く。湍の廻るは規に似。矢の激するは繩の如し。利に因つて節を騁せ、情采自ら凝る。轡を枉げ歩を学ぶも、力は襄陵に止らむ。

（文の形体が生じてそこに自づと勢が定まる、体は始、勢は末。始末相承くべきもの、恰も湍廻つてはその勢まろきこと規（ぐわんまわし）のごとく、矢疾飛してはその勢直なること繩（すみなわ）の如し。その時のよろしきによつて調節して、情緒辞采自ら凝る。もし強いて異を学ばゞ、かの邯鄲の歩の如く、遂に古きも新らしきも共に失つて了ふであらう。文体に応じて夫々そのとる可きゆき方がある。いかなる辞采も、この体に応ずる勢に沿ふものでなければならぬ。徒らに新奇を好み、この体にふさはしき勢を乱すも、それはたゞ浅薄のそしりを免れまい。文体の各々と、その自然とる可き勢。勢とは決してたゞ雄壮慷慨の気を以てやることではない。夫々の場合その当然とる可き態度を云ふのである。）

情采第三十一

（凡そ辞に美しい采があつてこそ文章と称し得る。而もこの書の作者の当時、齊梁の世に於ては、文体は徒らに縟麗に趨き、彫飾をのみ誇る有様であつた。是に於て作者は近世の作品の文が質に勝り、競つて奇に趨き縟に走るを嘆き、古に帰つて本を立て、文質相調和せんことを強調したのである。作者といへども決して只太古の質朴をのみ目標としたのでなく、凡そ文章といふからには必ずそこに美しい彫飾、時代と共に変化発展しゆく修辞の美を重んじたことは已に上に屢々のべてゐる所である。只あく迄根幹確立した上で枝葉繁茂することを忘れまじきを強調したのである。）

聖賢のしるしたことばを総べて文章といふ。已に文章といふからは、あやかざりでなくて何であらう。水の性は虚う

して而もその表に淪漪生じ、木の体は質実なれど、そこに美しい花が咲く。文が質に附してあらはれるのである。虎豹の皮に紋なくば、その鞟は犬羊と差無く、犀兕の皮は丹漆もて彩が施される。之れ質が文を必要とする所以である。かくて性霊を綜述し、形象を描写し、心を文字に鏤め、辞を筆紙上に織りなすとき、そのかゞやかしさのあるところ、之を縟采と名付ける。故に文を立てる道に、三つの理あり。一は形の文。五色（青黄赤白黒）がこれ。二に声の文、五音（宮商角徴羽）がこれ。三に情の文、五性（仁義礼智信）がこれ。

五色雑つて黼黻の采となり、五音比んで韶夏の音となり、五情発して文辞文章となることは定まれる自然の妙理である。

孝経は後世に訓を垂れて、喪礼の言は文らず、といつてゐる。だから君子たるものの平生の言はやはり質といふわけではないのを知る。

老子は人為技巧を憎んだが故に、美言は信ならずと称したが、而もその道徳経五千言の精妙さを見れば、彼亦美を棄てたわけではない。荘子は「（古の王者は）弁、万物を彫る」と云つた。言辞に藻飾があつたことを謂ふのである。

韓非子は「弁説に豔采あり」と云つた。言説の綺麗さを謂ふのである。

綺麗にかざつて言辞を美しく工夫すること、文辞の変化はこゝに極まる。

孝経や老子をよく研めれば、その文・質の全く性情に附随してあらはるゝを知り、荘子韓非をよく覽れば、華実の程が、淫侈に過ぐるを見る。若し源を涇渭清濁の流れに択び求め、正邪の路をわきまへてこゝに馳するならば、かくてこそ思ひのまゝに文采を御することが出来よう。思ふに鉛黛は容を飾るものであるが、瞳のすゞしさは本来

の淑姿に生ずる。文采は言を飾るものであるが、言説の麗しさはその人の情性に本づく。故に情は文の経(たて)であり、辞は理(ことわりとこ)の緯(よこ)である。経正しくして後緯も成り、言はんとする所の理(ことわり)定つて後辞も暢びるので、之文を立てる本源である。

昔詩経詩人の三百篇は情の為めにして文を造つたものである。何故かとならば、思ふに風雅の発するや、志思胸にみちわだかまり、こゝろのまことを吟詠してその上を諷諭したので、此れ情の為めに文を造せるものである。諸子の徒は心にわだかまる思あるにもあらで、たゞ苟めに誇張藻飾をほしいまゝにして世の喝采を求むるもの、此れ文の為めに情を造れるものである。

故に情の為めにする者は無駄なく要をつかんで眞実を写し、文の為めにする者は淫りに麗しく濫に陥る。而るに後世の作者はこの濫をえらんで眞を忽せにし、遠く三百篇風雅の道を棄てゝ近く近代の辞賦を師とする。されば情性に本づく作品は日に疎く、文飾を競ふ作品は愈々盛となつたのである。

已れ深く高位高官を志し乍ら、うはつらに山沢を詠じ、心は当世の務めに纏はれ乍ら心にもなき脱俗の趣をのべるがごときは自然の心がそこに存せず、むしろ全く相反するのである。

凡そ桃李言はずして下自ら蹊を成すは、桃李にその実(とつ)有るが故であり、男子蘭(一)を樹うるも芳しからぬは、その情無きが故である。

(一)淮南子繆称訓。男子蘭を樹うれば、美なれども芳しからず。

かゝる微なる草木に於てすら、情に依り、実あるを要する、況や文章は志を述ぶるを本と為るもの、その言と志とが相反するやうでは、その文たるや何でとるに足らうか。

されば文辞を聯ね文采を凝らすのも、全くそれによつて心の理を明らかにしようとするので、若しも采飾溢りにして言辞正しからねば、心の理は却つて愈々かくれて了ふ。まことに翡翠の綸や桂の餌は、反つて魚をのがすものだ。莊子に「道は小成に隠れ、言は栄華に隠る」とはかういふ所を云つたものだらう。だからして錦を衣て裘衣するのは、衣裳の文のあまりにあらはるゝ惡くむが故であり、賁の上九、白に窮り、白を以て文飾の極致とするのは本に反るを貴ぶのである。

夫れよく法式を設けて、わが言はんとすることの理を正しくそこに立て、立場を定めて心をそこに置き、心が定り理が正しうして後辞藻をのべしき、文を以て質を滅さず、博大を以て心を溺らさず、紅紫の間色を屏けて、朱藍の正采をかゞやすならば、乃で始めて彫琢せるその章、彬々たる君子と謂ふことが出来よう。

贊に曰く、

言は文を以て遠しと。誠なるかな斯に驗あり。心術既に形はれて、英華乃ち贍る。吳錦は好んで渝り、舜英は徒に豔なり。采繁く情寡きは、之を味ふて必ず厭かん。

（左伝に云ふ、言は文あるによつて遠く達すると。そのことばこそ驗あること。心の働きが言にあらはれて、そこに英華が豊かに生ずる。されど実なき華かさは吳錦の色の渝り易きが如く、舜華の徒に艶にしてはかなきが如く、采飾余つて眞情乏しきは、之を味ふ間に必ずや厭き去るものである。

情性に本づく文采、文はあくまで麗しかる可く、而もその美は眞情にもとづかねばならぬ。文の為めにして情を造る虚飾の作品の益々盛ならんとする当時の傾向に対して之を是正せんとしての立論である。）